

わたしの原点があるまち、あさひ

〈国内外で活躍する
旭市出身者からのメッセージ〉

旭市で生まれ育ち、現在はスポーツや文化など、さまざまな分野で活躍されている4人の方々に、ふるさと旭に対する思いや、将来への希望などを語っていただきました。



ピアノを始めたきっかけを教えてください。

風さん 両親が「何か楽器を習わせたい」と思っていたようで、3歳のときにピアノ教室へ連れて行かれたのがきっかけです。

父がクラシック音楽好きで、家ではいつもレコードやCDが流れていました。

飛鳥さん 2年早くピアノを始めていた兄(風さん)の後を追うように、ピアノ教室に通うようになりました。気付いたらピアノに触れていたという感じです。

思い出に残る旭市での演奏会がありますか。

風さん 初めて演奏したのは、市民が参加できる「グリーンコンサート」でした。東総文化会館という大きなホールでピアノを演奏できて、とてもうれしかったです。子どもの頃から慣れ親しんだ東総文化会館は、今でも特別な場所です。

飛鳥さん 平成23年8月に兄と出演した東総文化会館での演奏会が印象に残っています。東日本大震災が起きてからまだ半年ほどで、大きなショックと混乱の中で日々を過ごしていました。三善晃さんの「唱歌の四季」という作品を演奏しましたが、とても温かく柔らかくて、張り詰めた心がほぐれていくような：不思議な感覚に包まれたのを覚えています。

地元の応援は力になっていますか。

飛鳥さん そうですね。旭市で演奏すると、いつも温かく迎えていただいています。平成29年に留学先から一時帰国した際、あさひ少年少女合唱団のコンサートに出演したときは「ようやく自分の家に帰ってこれた！」という気持ちでいっぱいになりました。

風さん 旭市での演奏会では、

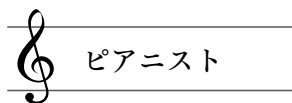


ホームにいるような気持ちになります。東京でのコンサートにも旭市から足を運んでくださる方がいて、お会いできると本当にうれしいです。

旭市で育ったことが音楽に影響を与えている部分がありますか。

風さん 旭市の演奏会に来ていただいた方から「ここで育ったからこそ、伸び伸びとした自然体な演奏になるんだね」と言わ

「故郷に育まれた音で クラシック音楽の魅力を伝えたい」



じつ かわ かおる
実川 風さん

プロフィール

東京藝術大学を首席で卒業、同大学大学院修士課程を修了。令和6年4月から同大学にて専任講師を務める。平成27年にロン・ティボー国際コンクール第3位(1位なし)、平成28年にカラーリョ国際ピアノコンクール第1位・聴衆賞など、多くの国際コンクールで入賞。現在も国内外で演奏活動続ける、若手を代表するピアニスト。



じつ かわ あすか
実川 飛鳥さん

プロフィール

東京藝術大学、同大学大学院修士課程を経て、グラーツ国立音楽大学修士課程を最高点で修了。平成24年に第2回ハノイ国際ピアノコンクール第1位、平成28年にマルタ・ディベッリピアノコンクール第1位など、国際コンクールでの上位入賞多数。地元旭市を拠点に、ピアノソロのほか、室内楽・歌曲伴奏など幅広い分野で活動。

飛鳥さん 私にとって旭市は「エネルギーをもらえる場所」です。青々と稲が育った夏の田んぼの風景が大好きで、安心感と力強さに包まれます。のんびりとした空気はとても居心地が良く、私の性格や価値観の根っこになっているように思います。**旭市の魅力を教えてください。**
風さん 野菜や肉、魚、果物など、食べ物が新鮮でおいしいところです。今は県外で暮らしているのですが、ふるさと納税で旭市の食べ物を取り寄せています。妻も旭市が気に入っていて「一度旭に住んだら東京に戻れなくなるかもね」と話しているほどです(笑)。

飛鳥さん 最近は、市内にもおしゃれなレストランが増えていきますよね。都内の同じようなお店と比べても、旭市の飲食店はおいしいと思います。やはり食材が良いからでしょうね。**今後の目標や抱負を教えてください。**
風さん クラシックは「堅い」というイメージを持たれがちですが、生の音には心を揺さぶる力があります。普段はスマホで音楽を聴いていても、生演奏の場では音の美しさや楽しさを体感できます。非日常を味わっていただけるよう、毎回のコンサートを大切に全力で取り組んでいきたいです。

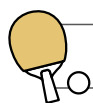


※インタビューの全文は、市ホームページで見ることが出来ます。



飛鳥さん 旭市20周年、おめでとうございます。人々の温かさ、温暖な気候、美しい風景、そしておいしい食べ物に恵まれた旭市が、これからも生き生きと続きそうです。心から願っています。

「地元の声援を力に変えて 世界を目指します」



プロ卓球選手

しば た さ き
芝田 沙季さん

プロフィール

6歳のとき「旭スタークラブⅡ」で卓球を始める。卓球強豪校の四天王寺高校(大阪)に進学し、平成26年、27年のインターハイで3位。令和元年に世界ランキング13位、令和3年には日本代表として世界選手権大会に出場。ワールドツアーのシングルの部で6回、ダブルスの部では7回優勝。現在は、日本ペイントグループに所属。



卓球を始めたきっかけを教えてください。

いところが所属していた「旭スタークラブⅡ」を見学して「とても楽しそうだな」と感じたのがきっかけです。クラブの皆さんがとても優しく、ラリーもだんだんと続くようになり、練習が楽しくなっていました。

印象に残っているエピソードはありますか。

小学1年生のときに千葉県代表に選ばれたことです。県予選が総合体育館で行われたのですが、全国大会の切符を勝ち取れて、家族や学校の先生がとても喜んでくれたことが本当にうれしかったです。小学2年生のときには全国大会でベスト8に入り、その頃から勝ちたいという気持ちが強くなりました。

プロになってからは、令和3年に旭市で行われたアジア選手権選考会で4位となり、日本代表に選ばれたことが印象に残っています。この年は世界選手権にも出場し、飛躍の年となりました。

地元から離れても、旭市とのつながりは続いているんですね。

そうですね。小学6年生のときに親元を離れたのですが、ア

ジアユース・世界ユース卓球選手権大会の選考会が毎年旭市で開催されるので、地元を身近に感じる事ができました。また、令和5年には「こども卓球台」を寄贈させていただきました。自分を育ててくれた旭市への感謝の気持ちを形にできたと思います。

地元の応援はとても励みになります。卓球選手として知ってもらえていることがうれしいですね。苦しいときやつらいときでも「頑張ろう」と思えるのは、地元の人たちの支えがあるからで、とても感謝しています。

旭市の魅力を教えてください。

まず、食べ物、特に果物がおいしいこと。メロンやナシを贈ってもらって食べるのが毎年楽しみです。それから、袋公園にあるじゃぶじゃぶ池には、よく遊びに行った思い出があります。旭市の人は、みんなが優しく温かいので、帰ってくる時ほっとしますね。私にとって、旭市は「心の休まる場所」です。

今後の目標や抱負を教えてください。

全日本選手権で優勝して、もう一度世界選手権に出場することです。旭市の皆さんに喜んで



提供：日本ペイントマレッツ

いただける結果を残したいです。また、いつか地元で卓球リーグの試合が開催されるようになるば、とてもうれしいです。

旭市20周年へのコメント、市民へのメッセージをお願いします。

20周年、本当におめでとうございます。これまでの歴史を築いてくださった皆さんに心から感謝いたします。私は卓球を通じて貢献できるよう努力していきますので、引き続き応援をよろしくお願いします。

※インタビューの全文は、市ホームページで見ることが出来ます。





「絵画を通して 地域の発展に貢献したい」



日本画家

しい な たもつ
椎名 保さん

プロフィール

東京藝術大学日本画学科、同大学大学院を修了。日本画家の巨匠・平山郁夫氏に師事。大学院修了の翌年「有芽の会」への出品作品が法務省買上。その後も平成4年に院展初入選、平成8年にジャパンフェスティバル招待出品など、数々の実績を持つ。創作活動の傍らで日本画教室を主催するなど、絵画の魅力を広く伝えている。

子どもの頃から絵を描いていたのですか。

絵を描くことは好きでした。でも元々は体育会系なんですよ（笑）。市内小学校の陸上大会で私が出した走り幅跳びの記録が、今でも大会記録として残っているそうです。中学では陸上部に所属し、ハードルで全国大会4位にもなりました。

絵画の道へ進むうと思ったきっかけを教えてください。

高校は県内の陸上強豪校に進学したのですが、そこで美術講師をしていた東京藝術大学の大学院生との出会いがきっかけでした。その先生と親しくなり、家に遊びに行ったときに目にした美術雑誌の作品が素晴らしく、その作者が藝大の教授だと聞いて一気に憧れが強くなりました。3年と決めていた最後の年の挑戦で、何とか合格できました。入学後はアルバイトをしながら絵を学び、大学院卒業後に予備校講師や画材販売などの仕事を経て、画家になりました。

旭市の風景も多数描かれていますよね。

そうですね。その中でも旭中央病院に飾られている2枚は、特に思い入れの強い作品です。

「黎明」は刑部岬に昇る朝日を描き「展望」は刑部岬から見た夕焼けの九十九里浜と富士山を描いたものです。平成22年に依頼があり、半年間取材を重ねてから制作に着手しました。制作中に東日本大震災が発生したため、完成間際に波の描写を変更したのを覚えています。

刑部岬と九十九里浜を題材に選んだ理由は。

旭市の大きな魅力の一つです。からね。広大な砂浜で、朝日と夕日のどちらも見られる場所がそうありません。作品には「旭が発展してほしい」という願いを込めました。私は主なテーマを「光と風」としているのですが、飯岡刑部岬展望館に「光と風」という名前が付いていることにも縁を感じました。市内には素晴らしい題材が数多くあります。千潟八万石や龍福寺の紅葉も描いてみたいですね。

今後、旭市にはどのようなまちになってほしいですか。

子どもたちが伸び伸びと育ち、一度地元を離れたとしても、また帰ってこられるような活気あるまちであってほしいですね。旭市だけでなく周辺地域とも連携して、九十九里浜などの魅力



を生かしていけば、この地域はもっと豊かになると思います。
旭市20周年へのコメント、市民へのメッセージをお願いします。

年齢を重ねるにつれ、故郷の温かさをより強く感じるようになりました。いつ帰ってきてても安心できる、そんなまちであり続けてほしいです。旭市には若い世代で頑張っている人たちも多くいます。まちがさらに活性化していくよう、私も微力ながら協力したいと思っています。

※インタビューの全文は、市ホームページで見ることができます。

